



震災の体験の中から

東日本大震災は、死者・行方不明者2万5千人、その他の土地・家屋・資産の喪失は25兆円規模に上るといわれます。人も物も、犠牲はあまりにも大きく、言葉に尽くし得ません。本学の関係者の中にも、辛い思いをしながら学んでいる人、働いている人が多数おられます。

現代の先端科学・技術の上に築かれた社会というものが、普段は便利でありながら、それが危機においては却って仇^{あだ}となって、如何に脆^{もろ}いかということも、知ってはしながら、あらためて痛く実感させられました。電気が来ない、水が出ないということになりますと、私たちの都市生活はたちまち成り立たなくなってしまう。この震災は、今後の文明の組み立て方そのものの問いなおしを迫ることにもなりましょう。

いよいよ、初期対応の段階から本格的な復旧・復興への長い歩みが始まるわけですが、私たちは、事態を殊更に楽観し、安閑と過ごすのでもなく、また殊更に悲観し、特に風評に浮足立って、騒ぎまわるのでもなく、事に応じて冷静な判断を下しながら、日常の十全な教育活動の実現に取り組んでいかなければなりません。

この未曾有の震災については、皆さんもそれぞれに感じるところがあるのではないかと想像しますが、私は、この惨状と荒廃の中から、何か日本人皆が今掴みかけているものもあるように思います。特に戦後の私たち皆がすっかり忘れてしまっていた過去の記憶の中から、一人ひとり何か手繰り寄せようとしかけているものもあるように思います。それは、人は独りで生きているのではない、私たちの命や生活というものは多くの恵みと多くの支えの中で初めて、しかもかろうじて成り立っているのだという、この当たり前の事実をどうしようもなく思い起こさせられているということなのではないかと思えます。普段は当たり前過ぎて見えなくなっているところがあるとしても、しかしそれらが無かったとしたら、私たちの命も生活も有り得なかった、有り難かった、その事実をどうしようもなく思い知らされているということなのではないかと思えます。また、そうであればこそ、皆自分は誰かの力になり得る、また力になりたい、そのことを切実に思い起こさせられているということなのではないかと思えます。

3月11日からそう経っていない頃のことです、東京のあるラーメン屋さんが東北の被災地に出かけて行って、ラーメンの炊き出しをしているシーンがニュースで流れていました。その人が「何故、炊き出しに出かけてきたのか」という記者のインタビューに応じて、ごく素朴に、むしろ控えめに、こういっていました。「いやあ、ラーメン屋はラーメンを作る、ま、そんな感じですかね」って。私は、頭が下がりました。自分の出来る仕事を通じて、損得勘定を抜きにして、自分を社会に役立てようとしている。

よく、戦後の日本人は、身勝手に、自己中心的で、自分の関心事だけが大切で、他人がどうなろうと構わない、そう思う人たちがばかりになってしまったといわれるわけです。確かに、それもまた否定出来ない、戦後の私たちが作った、つい先だってまでの日本の精神風土でありました。

しかし、今回の大震災にあっては、テレビの中でも、街中でも、市井しせいの人たちも、著名な歌手や俳優も、年配者も、若者たちも、皆声をそろえて「日本人は結束しよう、支え合おう、皆が力を合わせれば、必ず復興出来る」と言い続けている。東浩紀さんという早稲田大学の教授の方がニューヨーク・タイムズに一文を寄せ、「日本人の間で『公共』についてこれほど取り沙汰されているのを、僕は見たことが無かった」と書いていました。

ご高齢で、ご健康が必ずしも万全ではないと伺っている天皇・皇后両陛下も、宮城へ、岩手へ、福島へと、毎週のように行幸を続けられました。誠におそれ多いことですが、私は、両陛下は命を賭けておられたのだと思う。

とても衝撃的でしたのは、南三陸町役場危機管理課の遠藤未希さんという24歳の女性の行動でした。防災対策庁舎の2階で、自分の役目と心得ていたのでしょう、「6メートルの津波が来ます、避難して下さい」と、防災無線で町の人たちにアナウンスを流し続けて、最後は津波にのまれていったそうです。その勇気たるや、すさまじいものがあります。彼女は、日本の津々浦々どこにでもいる極普通の人です。この他にも、多くの遠藤未希さんがおりました。でも、その普通の人々が持ち場を離れず、命を賭して皆のために使命に殉じる、また今も普通の人々が自分の仕事を通じて何にせよ自分を誰かのために役立たせたいと思っている。国民の悲劇を踏み台に、虚勢の笑いを振り撒きながら自分の延命のみを一義的に考える首相の精神の惨状と荒廃には絶望しますが、私は、こういう日本人が社会のあらゆる場面にいる限り、日本はこの危機を必ず乗り越えることが出来ると思っています。史家ランケがいったモラーリッシェ・エネルギー、復興への力は、長い共同体的生活体験の中で培われ、戦後はバラケテしまっていたとはいえ、こうした危機において呼び覚まされインテンシヴ求心的に働く日本人の倫理的エネルギーの中にあるのだと思います。

[>前のページへ戻る](#)